

# 巻頭言

## ポロメオの輪

富田三樹生 日本精神神経学会理事  
Mikio Tomita

無垢な子供は決して無垢そのものではありえない。子供はせいっぱい、力の限りを尽くして知略をもって世界にたちむかっている。大人は、この世界の中で、子供にとっては絶対と云ってよい力を背景として、育てようとする。

人の互いの愛情は、その苦悩のゆえに無限への渴望につながるが、個体としての有限性のために悲しくもささやかである。そして、時にそれは無残な憎悪に変換する。親は、獲物を、自然と人間社会で構成される世界から調達しなければならない。多くの生物は子供を育てることのみで、自己の個体としての命を死にゆだねることになるが、人類は、子供が成人した後も、老いつつある命を、個体として生き、そして病んで死ぬ。

自分の命を統合して生きる欲望、性的に対象に没入しかつその対象を所有しようとする欲望、社会の中で力や名誉によって立場を得ようとする欲望などが、人を支配する。貨幣価値は、日々の獲物を得ることとともに、他の欲望の達成のためにも有効であり不可欠ですらもありうる。資本は自己増殖を目的として世界のなかを駆け巡っている。欲望の渦のような社会は、国家をはじめとしてさまざまな統制的組織とその統制的価値を構成しなければならない。子供は、この統制的価値システムの中に生み出されると言ってもよい。しかし、現在この統制的価値システムそのものが、重層的で多様であり、欲望の渦によって荒れ狂って危機に直面している。欲望がぶつかりあい、砂のように人々が争っている。多くの統制的価値システム同士がぶつかり合い、憎しみが生じ、争いや戦争が絶え間なく起こっている。子供は、家庭というゆりかごから巣立ち、このような世界に、思春期を経て、大人として参入しなければならない。しかるに、多くの者は、生まれ落ちた時から、あらかじめゆりかごを奪われてい

る。そして、何者かが絶対的とも云える利益を得、無数の誰かがその犠牲となっている。しかも、誰もが、ある者に対してはよき者であり、他の者には悪しき者でありうることを引き受けなければならない。このような社会の中で、人は意味や価値を渴望して生きる。

二十世紀後期から、そして01年9月11日以後、私たちが生きている歴史が、ある転換をとげつつあるのかもしれない。近代西欧に生じた産業革命に似た、決定的な転換が起こっているのかもしれない。地球という規模で、不均等な世界が、地球の裏側からも瞬時につながる電子システムによって、資本と情報が流通して、人々や家族や国家が嵐のように揺れている。地球を覆う人間社会は、自然すらも変えようとしている。古代のローマに似て非なる帝国が現れているが、何も、その帝国の明日を保証するものはない。

私たちの精神科臨床の場は、次のような小さな、しかし、普遍的な問題が問いかけてられている。「私のこの苦しみは何か、あるいは私は何者なのか、生きていてよいのか。この社会とは何か、それは生きるに値する世界なのか」。この問いは三つの位相を貫いている。それらは、一人の人間としての生命的個体と、個体が現実的に生きる社会と、個体が埋め込まれている人類という位相の三つである。精神医学は、このような問いを、自らの役割として正面からまともに引き受けることなどはできない。しかし、この問いに対して、より小さい「医学」というフィールドに読み替えて、対処しなければならない。精神医学は臨床であるかぎり、この三つの位相をポロメオの輪のようにして結んでいる。一つの輪は、そのみでは成り立たず、他の二つの輪によって成り立っている。二つの輪は一つの輪によってつながれている。